

【流域いろいろ】

解体が進む天草下浦石工の鳥居

時松雅史^リ*

1 熊本高等専門学校リベラルアーツ系 〒866-8501 八代市平山新町 2627

I はじめに

天草市の下浦地区では、江戸時代から石工の活動が盛んに行われてきた。活動範囲は広く、北は有明海沿岸域の荒尾市、南は鹿児島県長島町、西は長崎市内と、九州西岸地域で多くの作品を遺している。本稿では、八代地域に点在する神社の鳥居に絞って、その現状を報告する。

筆者は、2004（平成16）年から2008（平成20）年にかけて、八代・芦北・水俣、さらに鹿児島県長島町で天草下浦石工による鳥居の共同調査を行い、八代海沿岸部に多くの作品があることを明らかにした。また、この時期に、解体される鳥居や傷みの激しい鳥居を見ていたことから、砂岩製の石造物は風雨による浸食に弱いということも指摘した。それゆえに、劣化が進む鳥居のことを気にしつつ、初めての調査から10年が経過し、さらに2016（平成28）年4月に熊本地震が起きたことから、鳥居の状況を再度確認しておく必要があると考え、調査を行った。

II 八代地域の砂岩製の鳥居

はじめに、八代地域の砂岩製の鳥居について、概要を述べる。立地場所は、北から妙見宮がある古麓地区、球磨川をはさんで豊原上町等の高田地

区、さらに敷川内地区と日奈久地区に集中している。製作年代は、古いものは二見地区にある久多良木神社鳥居で1761（宝暦11）年である。また、解体されて神社の境内に保管されているが、妙見宮の鳥居も宝暦年間のものといわれている。鏡町の八大竜宮社鳥居は文政2（1814）年、二見地区の二見阿蘇神社鳥居は嘉永3（1850）年である。明治期以降では、1886（明治19）年頃に製作されたものが7基ある。最も新しいものは、本町4丁目の住吉神社鳥居で1954（昭和29）である。

製作者については、黒川若松・森口清一・三山二蔵・菅原甚太郎・菅原幸太郎・山本義久・菅原幸三郎の刻銘がある。本町四丁目住吉神社鳥居を製作した黒川若松は、熊本市高橋稲荷神社鳥居も手がけている。三山二蔵は高田地区にある遥拝神社鳥居と奈良木神社鳥居を造っている。菅原甚太郎と菅原幸太郎は敷川内地区の敷川内神社鳥居を共同で製作し、菅原幸太郎と山本義久が共同で催合町にある天満宮鳥居を製作している。日奈久地区では、日奈久阿蘇神社を除いて、石工銘が入っておらず、下浦石工が製作したものであると断定できない。しかしながら、鳥居の様式と石材を考慮すると、天草石工が関わっていることは間違いないと考えられる。

鳥居の大きさについては、日奈久阿蘇神社鳥居が柱間3.1 m、貫下3.1 mで、この地域の中ではスケールの大きな鳥居である。また、敷川内神

*Corresponding author: e-mail: tokimatu@kumamoto-nct.ac.jp

社鳥居や二見阿蘇神社鳥居も、貫下が2.7 mの
大鳥居である。

III 解体が進む鳥居

八代地域において、前回の調査では計26基の
鳥居の現存を確認できた。しかしながら、今回の
調査では、そのうちの八基が解体されたことがわ

かった(表1)。

本町1丁目の春日神社鳥居ならびに植柳元町
の植柳神社鳥居は、前回調査の直後に解体されて
いた。その後、豊原上町の遥拝神社鳥居と豊原下
町の奈良木神社鳥居が、相次いで解体された。こ
の両鳥居は、前述のように、下浦石工の「三山二
蔵」という石工が造ったものである。石工銘が刻
まれている貴重な鳥居であっただけに、はなはだ

表1 八代地域にある砂岩製の鳥居一覧

市町村名	町・字名	神社名	建設年	石工名	状況
八代市鏡町	有佐	松尾神社	不明	不明	修復あり
	貝洲	貝洲加藤神社	明治元年(1868)頃	不明	地震後、解体
	内田	八大竜宮社	文政2年(1814)	不明	地震後、解体
八代市	妙見町	八代神社(妙見宮)	宝暦年間(1751~1764)	不明	解体
	妙見町	霊符神社三の鳥居	江戸時代後期	不明	金具で補強
	妙見町	古麓稲荷神社	江戸時代後期	不明	修復あり
	古閑中町	若宮神社	昭和19年(1944)10月	石翠堂	
	本町一丁目	春日神社	明治12年(1879)12月	不明	解体
	本町四丁目	住吉神社	昭和29年(1954)4月	黒川若松	
	植柳元町	植柳神社	大正14年(1925)7月	森口清一	解体
	豊原上町	遥拝神社	明治21年(1888)1月	三山二蔵	解体
	豊原下町	櫛田神社	明治19年(1886)1月	不明	解体
	奈良木町	奈良木神社	明治20年(1887)2月	三山二蔵	解体
	葭牟田町	彌次神社	明治26年(1893)9月 新額東裏に記載	菅原口太郎	解体
	鼠蔵町	弥継神社	明治19年(1886)1月	菅原甚太郎	
	敷川内町	敷川内神社二の鳥居	明治18年(1885)	不明	解体
	敷川内町	敷川内神社一の鳥居	明治24年(1891)3月	菅原甚太郎 菅原幸太郎	
	敷川内町	敷川内天満宮	明治25年(1892)6月	同上	
	催合町	天満宮	昭和3年(1928)1月	菅原幸太郎 山本義久	
八代市日奈久	大坪町	日奈久阿蘇神社	大正9年(1920)9月	菅原喜三郎	地震後、修復
	大坪町	若宮神社	明治31年(1898)9月	不明	
	竹之内町	竹内神社	明治19年(1886)10月	不明	柱の剥離が進む
	中西町	温泉神社	不明	不明	解体
八代市二見	中西町	稲荷神社	昭和10年(1935)2月	不明	朱色で着色
	二見本町	二見阿蘇神社	嘉永3年(1850)11月	不明	
八代市	二見本町	荒平神社	明治32年(1899)2月	不明	
	久多良木	久多良木神社	宝暦11年(1761)	不明	柱の剥離が進む
八代市坂本町	渋利	毘沙門天	明治28年(1895)9月	不明	貫が修復
			不明	菅原小口郎	解体 柱のみ



写真1 解体されて奈良木神社の境内に横たわる鳥居の柱等の部品



写真2 保存状態が良好な弥継神社の鳥居

残念である。遙拝神社の鳥居は2015(平成27)年4月に新しい鳥居に建て替えられた。奈良木神社の鳥居は建て替えられることなく、柱等の部品が境内の隅に保管されている(写真1)。その奈良木神社の近くで、八代第五中学校の裏手であった櫛田神社では、鳥居はが神社の建物本体と一緒に解体処理されていた。それから、日奈久仲西町の温泉神社鳥居も、2015年頃に解体されていた。

その他、熊本地震の発生によって、八代市鏡町内田の八大竜宮社鳥居が倒壊した。この鳥居は、2018(平成30)年三月に新しい鳥居に建て替えられた。同町の貝洲加藤神社鳥居も、地震による倒壊の危険性が生じたため、地震発生の数か月後には解体処分がなされていた。この鳥居は明治元年頃に建立されたもので、柱も太く、威容を誇っていただけに、残念である。また、日奈久大坪町の日奈久阿蘇神社鳥居は、解体は免れてはいるが、額東は新しいものに取り替えられている。また鳥居の全身はコンクリートか何かで覆われ、石に刻まれていた文字もすべて見えなくなっていた。熊本市や震源地の益城町等では、鳥居の柱が

倒壊するものが多かったことを考えると、八代地域の鳥居の被害は小さかったといえよう。

IV むすびにかえて

今回、10年ぶりに八代地域にある砂岩製の鳥居をみる機会を得たが、やはり倒壊の危険性から解体される鳥居が増えていることがわかった。すでに、貫等を金属板で補強しているものもあり、寄進者が現われれば、早急に新しい鳥居に建て替えられることであろう。一方で、まだ保存状況の良い鳥居も見受けられた。特に、鼠蔵町の弥継神社鳥居と二見地区の二見荒平神社鳥居は、大きな損傷もなく、刻銘もはっきりと残っていた(写真2)。これらの鳥居に共通するのは、周囲が木に囲まれていることである。直接、風雨の影響を受けないことが、功を奏しているものと考えられる。今回は、八代地域に限定して鳥居の確認作業を行ったが、近いうちに、芦北、水俣、さらには鹿児島県長島町でも行いたいと考えている。

V 引用文献

- 1) 佐藤伸二・下田貞幸・時松雅史・石原 浩・桐野徹朗 2008. 天草石工の活動を通じた環不知火海の歴史と文化. 八代工専創立30周年記念誌, pp. 1-5.
- 2) 時松雅史 2017. 鳥居にみる天草下浦石工の活動. 熊本学園大学経済論集 23: 181-191.